

第24回日本胸部外科学会をお世話した思い出

第24回 会長 石 川 七 郎

私がお世話をした、第24回日本胸部外科学会総会は、会期が1971（昭和46）年9月2日（木）3日（金）の2日間である。会場は国立教育会館とイイノホールの2つ。この年は残暑のきびしい年で、連日30℃前後の暑さにあえいだ記憶があるが、どうして9月上旬をえらんだのか分らない。おそらく、他の学会との期日の関係があったのであろう。

この会期2日間というのは、今思いかえしてもコンパクトでよかったと思う。この頃は3日間になっているが、それは会員増のためもあるだろうが、毎年、同じような水増し演題やシンポジウムを並べなければ学会にならないと考える八方美人的思想のためではなかろうか。学会は医学校の教室大会ではない。優れた業績を登場させ、十分に討論してもらう場であり、それを2日間にまとめればいい。

あのときの、私の基本的な考えはこのようなものであったと思う。したがって、まず、公募演題を重視して、夫々専門のプログラム委員に厳選してもらった。公募演題というのは、例年、一般演題として募集されるものであるが、玉石混淆の著しい内容をもつジャンルである。ただ、玉のうちにはダイヤモンドやルビーが多数に含まれているから、これをピックアップするのが会長の重大な責務であろう。公募演題の応募は124題あり、厳選されたもの42題（心36、超低体温2、食道2、肺1、縦隔1）で、これらは前述のように、その内容の優秀性のために選ばれたのであるから、同じ施設から複数の採用をみたものがある。記念のために書いておくと、公募3題を採用されたところ——札幌医大胸外、新大外科第2講座、名大1外の3教室、2題のもの三重大胸外であった。

さらに、この42題のうち、心関係38題について、できの良い順位を榊原任先生にお願いして採点をしていただいた。2日間にわたって長時間（演説時間8分、討論7分、計15分 38 9時間30分）こんなことをしていただいたことを想うと、すまない気持で一杯である。愛する胸部外科学会にたいする責任感と私との友情のためにやって下さったに違いないが、それにしても9時間30分と今はじめて知って身の縮む思いがする。榊原任先生ありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

その結果は4題の優秀作にしばられて、甲乙をつけ難いと仰言る。実は最優秀の業績に会長賞をお1人だけに贈呈すると公告していたので、とにかく1題にしばって下さいとお願いして、三重大学胸部外科、草川実先生他8名の業績「拍動流湍流による長時間体外循環について」が受賞することになった。会長賞の規準は、1) 内容が一級である。2) 発表が平明で学会を盛り上げた。以上の総合評価である。受賞式は壇上で行い、賞状と副賞（金五万円と医学辞典）とを差上げたが、私はとても爽やかな気分になり嬉しかった。賞にもれた3つの業績についても、その次第をいい、お名前と演題とを披露した。

その他の企画として、セミナーを13主題作って公募した。これらは年次の重要研究テーマと考えられるもので、各主題毎に8～10名の演者を撰出し、司会者の誘導によって気楽に、しかも内容の濃い話し合いができるように1主題3～4時間をあてた。研究グループの勉強会的雰囲気を目指して、それぞれ40～80名収容可能な会場を用意したにもかかわらず、きわめて活発な討議場となり、

会員から部屋のせまさを不満とする声がきかれた。主題「骨肉腫の肺転移の治療」のセミナーには Memorial Sloan-Kettering Cancer Center の Dr. E.J. Beattie, Jr. が参加され“Aggressive surgical attack for metastatic sarcoma of the lung”と題して、豊富な症例にたいするまさに aggressive な治療結果を報告され、深い感銘をあたえた。公募演題のうち、82題は示説コンファレンスとして採用した。従来、演題発表時間の制約の理由で選考にもれた一般演題を示説にまとめる企画がなされるのが通例であったが、この主旨は本質的にことなり、発表内容が示説に適しており、図表中心の討議が理解をより容易にしうる性質の演題を厳選したものである。82題を17主題に分類し、あらかじめ依頼した司会者の誘導によってパネル上の業績を説明し、討論するものである。このために3会場を2日間、フルに使用していただいた。演者が身近にいて図表が動かないので、質疑応答が能率よく迅速に行え、活気の溢れたものになった。またパネル面での討議終了後にひきつづきスライド映写のための別室を用意したが、会員からは「もたれるぐらい堪能した」との声がきかれた。

学会におけるシンポジウムやパネル、特講は会長が、その年次にふさわしいと思う主題を選んで、会員に前向きな指南を示すべきものと思う。その意味で、シンポジウム3、特講3を企画した。

シンポジウムIは、この年、肺・食道が他の学会で多数とりあげられていたので、「胸腺と外科との相関」について基礎から臨床へのつながりを期待したが、まだ機は熟さずという感じで、各個発表の集合報告に終った。各演者の業績そのものは立派であったが、それらがお互いに癒合しないのである。

心関係の重要課題として「乳幼児心疾患」および「連合弁膜症の手術方針」をとり上げ、シンポジウムとした。

特別講演は次の3題である。

「So called “Stage 0” Lung Cancer」Memorial Sloan Kettering Cancer Center, Dr. Edward J. Beattie Jr.

「“Shock Lung” following extensive trauma」Tulane University, Dr. Theodore Drapanas.

「Artificial Heart Valve Prosthesis for Aortic and Mitral Valve Replacement」Karolinska Sjukhuset, Dr. Viking Olov Björk.

私はこの学会で“わかり易い学会発表”をとくにつよく会員に要請した。それは話し合いの成果をより多くすることであり、学問にたいする会員の義務であることを強調した。そのために第18回日本医学会総会編集「わかりやすい学会発表（南江堂）」を参考とされるように希望し、私たちの日本胸部外科学会が世界にさきがけて発表形式の理想をしめして下さるようにおねがいをした。会期を通じて会員諸氏の誠意が感じられてうれしかった。

最後に、会場の設営および運営に心からの応援を送って下さった東京医科大学外科学教室、および慶応大学外科学教室にたいして感謝の気持を忘れることはできない (April 27, 1977)。

(国立がんセンター総長)